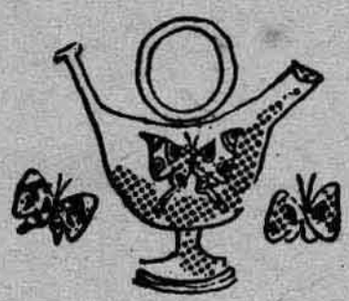
上方の町人文學

片岡良一



ラジオ新書

（6）

著者略歴

明治三十年生。
東大國文科卒、姫高、東京都立高校教授を經て法政大學教授となる。日本文學協會々員。

主著書

「井原西鶴」「現代作家論叢」「近代日本の作家と作品」「近代日本文學の展望」「文學の規準」

昭和二十五年十月二十日 印刷
昭和二十五年十月二十五日 發行

ラジオ新書 6
上方の町人文學
定價一二〇圓

著者 片岡良一
發行者 奥屋熊郎
東京都港區芝三田豐岡町八番地
印刷所 図書印刷株式会社

東京都目黒區下目黒一ノ一三五
NHKハウス
發行所 日本放送出版協會

はしがき

昭和十四年の末に東京放送局で日本文學史講座の連續放送が行われた。その時私は近世前期の町人文學を擔當させられたのであつたが、翌十五年五月、その際の原稿にかなり多くの訂補を加えて、「近世前期の文學」として刊行した。本書はそれの改訂版である。かなづかいを改めたほか、幾らかの訂正も加えてある。が、「近世前期の文學」といつても「上方の町人文學」といつても、結局は同じことになるようなものの、對象を見る角度には多少の相違が出來ることになるのに、それを意にみつるまで書き直すだけの餘裕はなかつたので、表題と記述の仕方には若干のズレが出來ていると思う。謹んでお詫びを申上げる。

全體の組立が五節になつているのはそもそもの放送回數が五回であつたことから來ているのだし、そのため記述の幾らか窮屈になつているところもあるかと思うが、然し、この時期の文學概說としては、それが大した無理になつているとも思われない。內容的に言つても、上方町人文學のおおよそと主要な

題目とについては、とにかく一通り觸れ得ているように思う。少くとも上方町人文學への入門書の役割ぐらいは果せるだろうと思う。私のものとしてはとにかくまとまつている方のものなのである。

ただ、何分にももう十年も前のものになるので、理解の不十分さや書き足りなさもところどころ目につくので、その後同じ時期のものについて書いたものの幾つかある中から、「元祿文化の歪み」一篇を、特に附錄として添えてもらうことにした。本文への多少の補足にはなり得ていようと思う。

昭和二十五年八月

著者

目次

一　上方町人文學の特質とその背景……七
上方の意味——近世前期文學の一般的特質——學問の勃興と歌壇の大勢

二　假名草子から浮世草子へ……四一
近世と小說——假名草子に現れた近世的特質——西鶴浮世草子の特質とその限界——その他の浮世草子作家

三　淨瑠璃と歌舞伎……八七
近世劇の題目——古淨瑠璃と初期歌舞伎の歷史——近松作品の特質——その他の戲曲作家

四　俳諧の諸流派……一三三
抒情詩としての俳諧の特殊性——宗鑑・貞門・談林その他——
芭蕉俳諧の特質——蕉門の人々と葛飾風
五　上方町人文學の轉向……一八〇
近松前期文學についての要約と轉向の必然性——八文字屋の氣
質物と俳諧の變質——竹田出雲等の合作と劇壇の風潮——結語
附　元錄文化の矛盾と歪み……二〇〇
——その文學的反映を主として——

上方の町人文學

一　上方町人文學の特質とその背景

上方の町人文學はその頂點期を元祿時代に持つておりますので、普通元祿文學とよばれています。ここでも話は當然その元祿文學が主になるわけですが、建前としてはその頂點期が劃出されるまでの文學の歷史や、頂點期を過ぎてやや下り坂に向つた頃の文學についても、一通り概觀する豫定になつております。要するに室町末期乃至戰國時代の頃から、信長や秀吉がそれぞれの力で天下を統一した安土桃山時代を經て、結局德川氏がその覇業を樹立することになつた江戸時代の前半期、大體桃園天皇の寛延寶曆頃まで約二百年間にわたつての文學の流れが、當面の對象となるわけです。大體その頃から江戸時代の終りまでを近世とよびますので、この話は正確に言えばその近世の前半、卽ち近世前期の文學の概觀ということになります。ですから話の中にも、上方の町人文學とか元祿文學とかいうかわりに、近世とか近世前期の文學とかいう言葉を多く用いることになると思いますので、その點あらかじめお含み置き下さるようお願い致します。そこでまずこの時代がどういう時代であつたかということから、話をだんだんに文學の方に向けて行きたいと思いますが、この時代は、所謂、下剋上の室町末期乃至戰國時代から信長秀吉等の崛起というところなどにも示されている通り、頼朝の覇府樹立以來の世の中の秩序が破

れて家柄とか身分とかいうものに拘りなく、實力あるものがその實力によつて頭を擡げて來た時代であり、それについてそれまで武士の下に抑えつけられていた農工商の人々が社會の表面に進出して來た時代――といううちにも商人の擡頭が目ざましかつた時代であります。そうしてその中心地が上方であり、そこを中心に新しい文化や文學が榮えることになりましたので、上方の町人文學などとよばれるものも成立したのでありましたが、彼等町人が名實ともに天下を支配するという時代は終に來ず、却つて豐臣氏に代つた德川氏が天下の權を握つて、頼朝時代直後と同じような――むしろより以上にきびしく整つた武士の支配が持ち續けられることになつたのでありました。それだけ世の中の組織が複雜になつて、それを反映する文學もまた複雜な性質を持つということになつたのであります。

元來商人というものは武士のように主君というものを持たない獨立した人間であります。武士は皆主君を持ち、主君から與えられる俸祿によつて生命を繋いでいるものであります。ですから自分の一身は主君に捧げ、主君のためには自分の命など問題にしないことになります。その意味で武士は自分というものを持たぬものです。それに對して商人は自分で働き自分の力で生活きて行かねばならない、獨り立ちの存在であります。ですから彼等には自分の力を尙ぶ自力主義と、自分を生活の主人として尊重する自主自尊の氣持が強いのです。氏系圖を誇るとか、家柄を自慢するとか、門閥を得意がるとかいうようなことがなく、裸一貫の人間一匹と、そういう人間の持つ力や才能が誇られる、つまり人間個々の持つ

ている値打が尊ばれるのです。そうして個々の人間が尊まれるのですから、彼等の個人的に持つている氣持とか人間的な感情――即ち人情などが尊ばれることにもなります。所謂人間的なものの尊重です。商人の擡頭した近世には當然そういうものが認められた、その意味で、近世とは人間的なものの尊ばれた時代であつたということになります。

しかし、そういう人間的なものの尊重は何も近世にはじまつたことではなく、中世以前の上代にもそういう氣持は頗る強かつたのです。詳しくお話するまでもなく、柿本人麿の歌や山上憶良の歌などを考えていただけば、その點自然明瞭になりましよう。人麿の激しい戀を歌つた作品にしても、憶良の強く子供を愛した歌にしても、何れも個人的人間的な感情への執着であります。そういうものが文學の題材として始終追求されている――それだけそれが珍重されていたことになりましよう。それが、その次の中世に入つてそういう氣持がすつかり弱められたのです。

中世というのは、前にもちよつと觸れました通り、頼朝が幕府を開いてから後ずつと武士が天下の權を握つていた時代であります。當然その時代には武士的なものの考え方が勢力を持つていました。個人的な感情などより秩序とか社會的な約束とかいうものが尊まれる、人間の命など鴻毛よりも輕んじて義に勇む、それと呼應して心持の安定を得るための宗教が榮える、ひいて現世よりも抽象された「名」の世界とか來世とかいうものが關心される――そういう時代でありました。

その時代が人情を殺して名義に生きるのを一般としていた趣や、宗教が極めて身近のものであつた貌は、よく文學に扱われている熊谷直實の場合などを考えていただいても、手輕に理解していただけましよう。彼はわが子の小次郎と同年配の可愛い敦盛を殺すに忍びなかつた。それが人情であります。が彼はその人情に生きることは出來なかつた。結局人情を抑えて敦盛を斬つてしまいました。平山等に見とがめられて、武士として義と名目とに生きなければならなかつたのです。しかもそうして斬つてしまつたあとで、彼は頭を丸めて坊さんになつてしまいました。それは中世に宗教が榮えた理由を説明するには稍ゝ容易に過ぎた、その意味ではあまりいい例でないかも知れませんが、それでもとにかく中世という時代の性質を一通り摑ませぬことはありますまい。中世とはそういう時代であつたのです。

前にも擧げた憶良は、最愛の子供が死んだときには、冥土の使いに賄賂を贈ろうと欲つています。幼い子供の冥土への旅を案じて、賄賂をやるから脊負つてやつてくれといつているのです。そんなにまで取りみだしてしまうほど感情的になつているのです。中世武士ならそんな場合賄賂と聞いただけで目に角立てるでしよう。それだけ人情とか人間的な感情とかいうものが強く抑えつけられるのが中世人にとつては普通のことであつたのです。それが近世になつても、一度さういうものが尊重されるようになつたのです。隨つてそれは上代に還つたともいえます。そうして現れて來た人間尊重ですから、それは單純に人間尊重というより、人間回復とか人間復興とかいう方が相應しい。さて、近世は一口には人間復興

の時代だということになるのです。

ところで、そうして人間を尊び、人情を重視するということは、また當然人間が住んでいるこの社會――現實にある社會を尊重したり、日常の生活を尊重したりすることを意味します。人間の人間としての生活――佛樣になつて後の生活などではない、現在の生活そのものを尊重するのです。そういう生き方を現實主義といいますが、近世は卽ちその現實主義の時代――人間自身の現在の生活が尊まれた時代であつたのであります。ですから眼前現實の世界を「穢土」と考えたり、濟季末世として輕視したりはしない。却つて人間の住む所を「花の都」と考えたり「目前の喜見城」と呼んだりしています。

「半天五色の雲引はへ、一歩小判の花降るは、日比撒置きし種ぞかし、世を先立ちし太夫ども、年月の御恩此度と、諸々の菩薩に姿を變へ、八葉の小布團に救取り玉ひ、玉琴に須賀垣を上せ、三筋に撥節、黄金盃、銀の燗鍋、七寶の菓子盆、靑磁の名香、箒の枝、何れも身より光を發ち、彼岸に引舟の女郎までも爰に現れ、女太鼓の藤も御機嫌取り、石車の伊右衞門が輕薄、井筒屋の太郎兵衞勝手に控へ、玉の箱階子揚れば、世界の傾國一目に、四方明の大二階、吉野が居姿、和泉が奴風俗、吾妻が閑雅面形、三夕が物越、小太夫が華奢氣質、夕霧が情貌、半太夫が美さ、和州がぱつとしたもよし、長門がもの謂はぬも位あり、大橋が自然と豐なる風情、其外太夫を揃えて、一座に見る事、前の世でならぬ事なり」

これは西鶴作『好色二代男』の主人公の臨終の模樣を寫したもの、所謂御來迎にかたどつた作意であ

りながら、佛も菩薩もあらばこそ、すべてが遊女其他の人間の形造るこの世の歡樂世界で、しかもその最後には「前の世であらぬ事」――つまりこの現實世界以外には望まれぬ景況だということが、はつきりといいきられているのです。人生絶對の想念がそれほどはつきりしていたからこそ、またこの人生におけるすべての事實を、出來るだけ人間の智慧や力で解決して行こうとする、前にもいつて自力主義の態度が打樹てられることにもなるのです。それがそういう世界觀を生きるものの自ら背負はねばならぬ責任になるのですから。

商人擡頭といふ面から觀た近世とは、そんな時代でありました。そんな風に人間が尊重され現實が重視された時代でしたから、文學も當然人間を重視し、現實ありのままの相を寫す傾向を強く持つことになりました。即ち寫實主義ですが、それは、ありのままの人間の生活やこの人生が文學に寫されていだけの價値もあれば面白味もあるのだとする、そういう考え方の上に成立つ文學の方法なのです。

近世前期はこの寫實主義への傾向が著しく強まつた時代で、文學の多くが眼前の事實を寫し紹介するというような性質を持つております。名所記とか評判記とかいつて、自分達が見ている名所古蹟やいろいろな人間の評判――噂や批評をした、その中にはまだ十分文學になりきらぬものもあるけれども、とにかく大體として文學的であつたものが戯立したり、小說などでも、自分達が見たり聞いたりしている巷の出來事などを、そのまま傳えたものが多くなつたりしています。詳しくは後の機會にお話しますが、

[illegible]とか、[illegible]という店がどういう主人の才覚によつて[illegible]多く儲るようになり、大[illegible]となつて行つたとか、反對にどういう理由で失敗したとか、何處にどういう席があつてそこにはどんな種類の遊女が居り、其處での遊びの樣式や雰圍氣はどんなものであるとか、放蕩者や不孝者にどんな種類や型があるとか、というようなことが、所謂小說的な脚色など殆ど加えられないで傳えられる。一人の人間――例えば夕霧なら夕霧という遊女が死ぬと、それがキッカケになつて彼女のことを書いた作品が幾つも現れる。人間が尊重されているから、その人間の死というような現象も重大視される、そこでこういう現象も生じて來るのです。芭蕉の臨終の模樣を書いた――それもただ日記風に書いた「花屋日記」などという優れた作品が、この時代に出ていることは多くの方が御承知でしよう。前に引用した御來迎まがいの情景などを作り出すというのから更に進んで、ただありのままの臨終其物の模樣が描かれて、それが重大な意味と感動とを以て受取られる――寫實主義が其處まで徹底して行つているのです。

こういう場合、それが單なる記錄であり、報告と紹介だけのものであれば、それがまだ文學になりきらぬものであることはいうまでもありません。其處に報告され記錄されている事柄の意味――芭蕉なら芭蕉が死んだという現象だけではないその現象のもつ意味が正しく捉えられて、それが讀者の感動にはたらきかけるように形象化された時、はじめて文學になるのであります。ですから寫實主義文學の髓というものは、そういう意味をどれほど深く、どれほど混り氣なく捉え描いているかという點に認められ

ることになります。いろいろな現象を繋いで、その現象相互の間に辿られる意味の發展や連關を捉える——それが寫實主義文學の筋になります。そういう筋なり意味なりに觸れないものは、まだ寫實主義文學としての魂を吹込まれない、單なる記錄でありお話であるに過ぎないもの、評判記などというものがまだ十分文學に成りきつたものとはいえない所以なのですが、とにかくそういうものをもこめて、近世前期は、こうして著しく寫實主義への傾きが濃くなつた時代であつたのです。際物といつて、事件があつて數日のうちにその事件がそのまま操り芝居の脚本にとり込まれたものもあれば、市井の出來事をそのまま作品化した世話物なども成立しました。世話物と違つて昔の人間を舞臺に登場させる時代物の場合にも、それらの人々が決して古い昔の人として昔の世界に登場するのではなく、矢張り近世の人として近世の世界に登場することになります。義經でも辨慶でも曾我兄弟でも、皆近世の人にされてしまつているのです。そう大昔ではない室町末期の亂世に取材したものですが、近松の『雪女五枚羽子板』という作に、足利將軍義教が赤沼入道の館で追難の「御祝儀」を行うことが書かれています。「御供の諸大名殘らず退出させ、古風なことをさらりと止め」て、その代りに「姉が小路の針屋の縫、紺屋のお染、白粉屋の艶、絲屋の房、舞子踊子」集め、琴三味線小唄の酒宴を開き、將軍義教が其中で「年豆」をぽりぽり食べる——そんなことになつています。同じ作の斯波細川等の忠臣が逆臣赤沼征伐の軍を動かず所は、「藤内四郎は犬二郎が背中に太鼓をくくりつけ、御出陣の武者揃へ、味方を集むる觸れ太鼓の、